



彼と彼女におじさんプラス



<彼と彼女におじさんプラス>

彼と彼女の間に いくつかの間にか入り込んでいる
催眠術マスターおじさんたちが
やりたい放題するお話

どんな感じの催眠をかけられてスタートするのか簡単に書いておきます

- ①寧々はおじさん(××)の「お願い」を何故か聞いてあげることになっていきます
彼氏の○○君に知られなければOKといった感じですよ
- 君も嫉妬や不安を感じつつも邪魔しないようにされています

- ②愛花は彼氏のM君の命令ならどんなハードな内容でも聞くようにされています
しかしM君はおじさん(□□)の言いなり人形です

- ③凜子はおじさん(△△)との浮気セツクスにドキドキといった感じでもシニカル

とある日 ○○と寧々は放課後を共にすごしていた

「ふふっ そうなの それだね〜」

「え〜 なんだよそれ〜 ははっ…おん？あれ？
xxさんじゃね…」

「え？」

「ごっち来るぞ…」

「あ…」

この時点ですでにxxは○○と寧々共通の知り合い
○○はxxが極悪だとは思っていない(と思わされている)

「なんだよ～寧々ちゃん～ 今日俺と約束があったのに酷いじゃん～」

「寧々さん…なんか用事があったの？」

「う、うん…まあ」

「まあ彼氏が最優先なのはしょうがないけど
連絡くらいはしかなかったなあ～」

「ご、ごめんなさい…」

「今からでも遅くないから…寧々ちゃんをお借りしても
いいかな○○君？」

「え？ああ…先約があったなら…まあ」

「彼氏さんからお許しがでたよ寧々ちゃん
さっ 行こうよ」

「そ、そうですね…じゃあ○○君…また明日」

「うん」

「あのさあ寧々ちゃん…俺の<お願い>を聞いてくれないと困っちゃうな〜」

「そ、それはわかってますけど…」

「あ、ひょっとして彼氏の○○君の事が気になっちゃってるの？」

「そりゃそうですよ…だって…変じゃないですか…彼がいるのにあなたと…するなんて…それに私がそんな事したなんて彼が知ったら…」

「別に变じゃないよ〜 それに寧々ちゃんはおくまで俺の<お願い>を聞いてくれる優しい人ってだけで浮気じゃないんだから彼を裏切ってるわけじゃないでしょ〜 もし知られちゃってもあんまり問題ないとおもうよ」

「う〜ん…まあ…そうなのかなあ…でも…う〜ん…」

「それに君たちの関係を壊す気は全くないからさ、もし何か問題が起こっても必ずフォローするから安心してよ。まあ、黙ってれば彼にはわからないけどね」

「う、う〜ん…でも…隠し事してるみたいなのが…気になるんですけどね…」

「それじゃあ 彼に電話する？」

「<今日はこれからセックスして処女を俺(××)にあげちゃいます、でも俺(××)のお願いをしかたなく聞いてあげるだけなんで浮気じゃないって、それなら隠すことにはならないでしょ？」

「そっ、そんな…ダメです…ダメに決まってるでしょ…」

「ダメかあ〜…じゃあ彼には黙っていいよっか
俺と寧々ちゃんのお秘密にするって事でいいね」

「その…××さんと…その…するのは…決定なんですわね…」

「そりゃそうだよ、やっぱり初めてだから怖いのかな？」

「それも…まあ…ありますよ…痛いって言うし…」

「それは大丈夫！おまじないしといたから、痛いどころか気持ちよくて
ビクンビクンしちゃうよ〜 楽しみにしててイイヨ」

「そ、そんな便利なおまじないあるわけないでしょ…しよらがないなあ…」

「嘘じゃないって 怖がらなくて大丈夫だからね、優しく丁寧にやるから」

「はいはい…」

「なんか信じてない感じだけどまあいいか…じゃあ ベッドの部屋に行こうか へんすへん」

「あっ…ちよ…そんなに引く張らないで…」

丁寧にベッドに寝かされ 股を開かされる寧々

「んんんん～ いい眺め…
(速攻お股をいじくり回したいけど
すこしガマンしよっど)」

「これは…恥ずかしいですね…!」

「恥ずかしいんだ? ふんっ…今 寧々ちゃんの
大事なところじっくり見てるよ～ ん? なんか
ふわっと お股から エッチな匂いがするような…!」

「やだ…もうっ…!」

「あ…寧々ちゃんが「お股見せ付けてくるから
もうおち○ちん固くなっぺきちゃった…」

「もうっ あなたがさせてるんでしよ…!」

「どれどれ 乳首が変な味しないか確かめてみようかな」

「へ、変な味? ……んっ…あの…んっ…どろですか?」

「ん? ちうちよつとなめてみない? ……あと
ちうちよつとそばにちうちよつとみると…寧々ちゃんは…」

「な、なに?」

「すごい良い匂いがする」

「……」

「寧々ちゃん」
「は、はい」

「おいしい…ちうちよつとなめてさせて」

「んっ…あつ…ちよ…ちよつと ちうちよつと
なんか…あつ…はあつ…」

「ん～ お乳が出てこないな～ ぷんぷん」

「で…出るわけないでしょう…」

「あれ？なんか もう ぬるっとしてるよ
エッチな気分になってきちゃった？」

「べ、別に…そういうわけでは…んっ…」

「そう？じゃあ エッチな気分になるまで
何時間でもグニグニするね」

「そ、そんなに…念入りに…しなくても…あっ♡」



「おち○ちん こんなに近くて見たの初めて？」

「ま、まあ……そうですわね……」

「どろ？」

「え？どろって……聞かれても……」

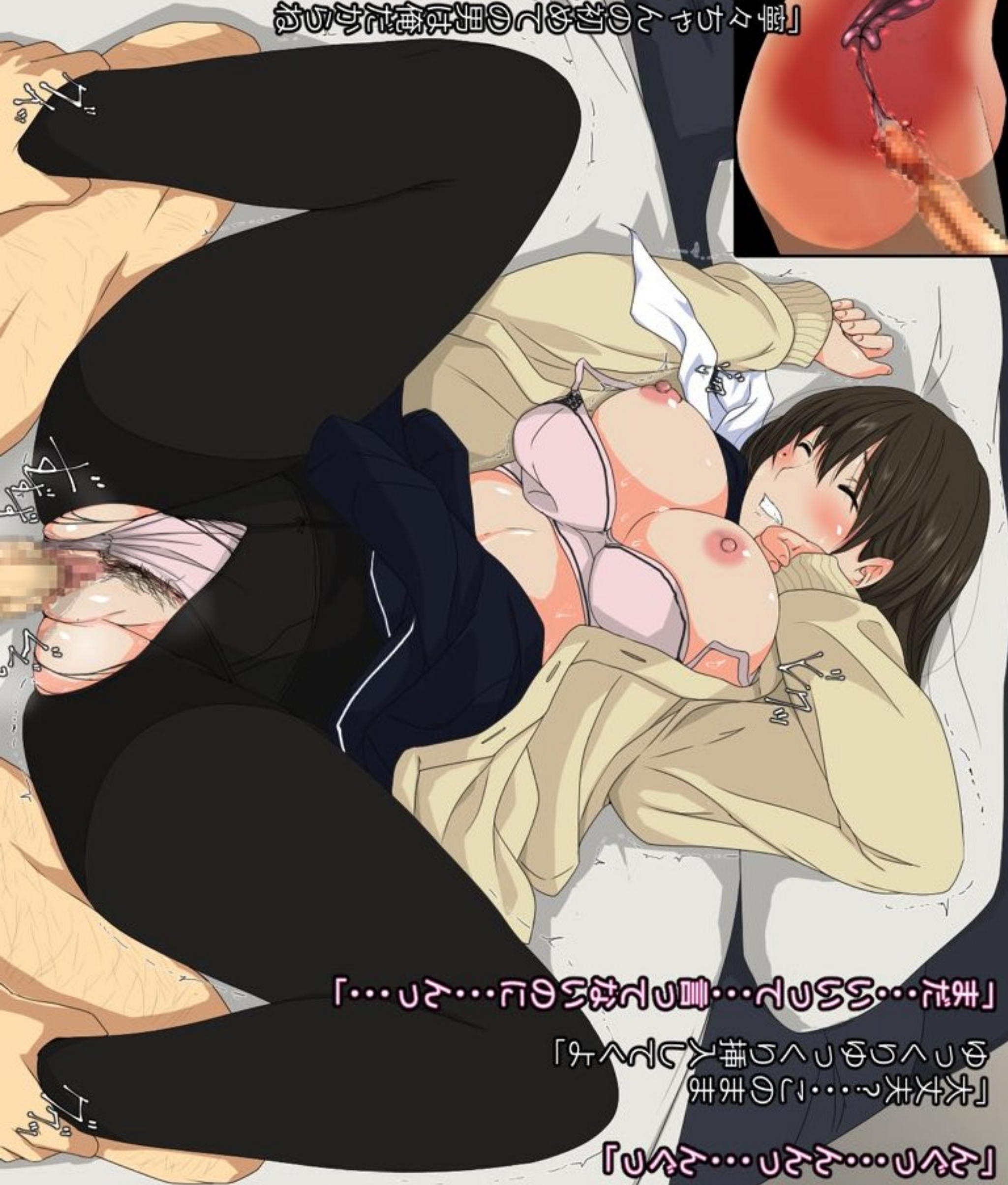
「これを寧々ちゃんの オマ○コの中にずっほり入れちゃうかな」

「大丈夫ですかね……な、なんか……想像してたより……だいぶ大きい気が……」

「大丈夫大丈夫 もうネツチヨネチヨになってるし ゆっくり入れていくかな」

「.....」

「.....」



「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「...うたて...うた うた...うた」

「~あはれやうにうたて
うた 動いよ ~」

「...あはれ...う...あはれ...あはれ」

「うたてうたあはれ
あはれうたあはれうたあはれ」

「...うた...うた」

「あはれ ~ うたてうたあはれ...うたあはれうたあはれ」

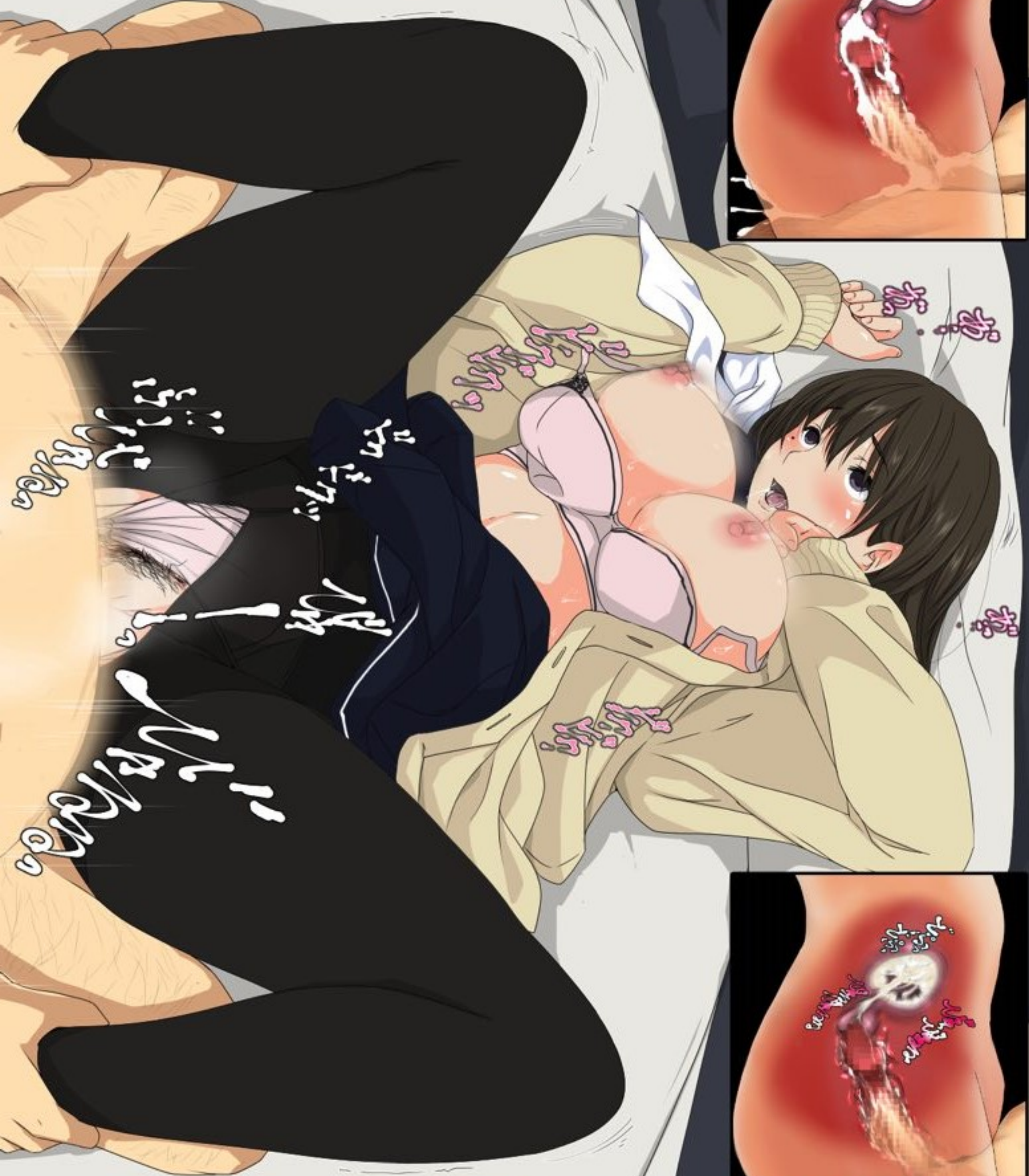




種々の許可をおこなはうまま ××は種々の腫肉に射精する



率々の大切が子宮は中年の精液で満たされる



強へ抗えなひ率々は 膈内に再び精液を注入される

...おんこを舐めたい...
おんこを舐めたい...
おんこを舐めたい...



「おんこ...おんこ...」

××おんこを舐めたい...
おんこを舐めたい...
おんこを舐めたい...



「なんで私にこんなことかよ...」

「お前さん、さあ...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

××のお願い/命令に素直に(多少の反発はある)従うようにさせられている寧々

なんかおかしいなあ と思いつつも とにかく彼氏の○○君に
内緒にしておけば大丈夫と思わされているようだ

ふら～…なんか変な夢みちまったなあ～
あの××とかいいうおっさんが寧々さんに馴れ馴れしくしてっから…気になっでんだるうか…
なんかあんまり寝た気がしないし…

しかし…やたらリアルな夢だったな…

〇〇君は その夢とやらを思い出ししてみる

またしても××に膣内射精をゆるしてしまう寧々
ゆっくりと深く染み渡るような快感を与えられて
満たされていた

しかし 満足感と幸福感で



××に犯され ぐったりしている聖々を
意識が混濁した状態で見つめる○○君

「こ、これ…大丈夫なんですか？…彼…起きてるんじゃないや…」

「大丈夫だよ 夢か何かだと思えばいいから」





「うんうん」

「かわいいわね〜」

「なに・・・おもしろいから、おもしろいから、おもしろいから〜」
「おもしろいから〜」

「えいよ・・・美世おもしろいから〜」
「漠然と嫌な感じ〜」

おもしろいから〜

「ア〜ア〜ア〜おもしろいから〜」

嫌な顔を見せられて・・・」

「ア〜ア〜ア〜おもしろいから〜」

「おもしろいから〜」

当然だが夢ではない

催眠で意識が朦朧とする中で見せつけられたのだが
目覚めたときに自宅のベッドだったので 夢だという結論に至っただけ

寧々が上手におちん○んをしゃぶれる事も
××のきつたないイザーメンを抵抗なくゴツクンしている事も
○○は今だに知らない

とある飲み屋、同じ能力を持つ仲間△△と××は会っていた

××「へ〜お前の女の子もカクイイな〜」

△△「××さんの気持ちよさそつすね〜、やっぱり付き合ってる男いたんですか？」

「まあな、このレベルの女は超高確率で男がくっついてるからな」

「ま、そうですよくんね」

「それと<いた>じゃな<いる>だよ、最後まで別れさせるつもりはないよ」

「うあ〜 相変わらず外道っすね」

「そんな事ないだろ〜彼らの関係を壊さないんだから、まあ人のモノを弄くり回すつてのが好きだけどもいえるが」

「彼氏さんかわいいそら…」

「お前は人の事いえないだろが…ま、まあ彼氏君には厳しい事になるかも
しれないけど…でも別に彼らを不幸にしたいわけじゃないからね、
たとえば妊娠しちゃったりしたら環境や金銭のフオーローはするつもりだよ」

「へ〜、俺は別れさせて飽きたら捨てちゃうつもりだったけど…そらが彼氏にも
催眠洗脳して押し付けちゃえばいいのなあ」

「嫌な言い方だなあ…押し付けるんじゃないの…奪わないんだよ」

「モノは言いようですよ…」

「飽きたら捨てるとかダメだぞ、もらった<カ>をもっと上手に使えよ…」

「ふう～xxxさんの話を聞いてたらス〇コに入れたくなってきた…」

凜子に電話する△△

「…ん？なに？」

「ス〇コするぞお～」

「…いきなりバカじゃないの、何？酔ってるの？」

「酔ってないよ、凜子お～ 凜子のス〇コなめたいよお～」

「ふう～…今 やる事あるの、切るよ」

「俺の部屋で待ってるからなあ～…待ってるぞお」

「しらんっ…、じゃあね」





「電話であとなにをいっただけかしら」

ホへは臙子おしゃりウズじだかんだとしゃほらるるん」

「はあ？酔っぱらっておやじの粗手をうておけとるん」

だから…余計な事言わなうてくれる…」

「なにかやる事あるてせじかんだとしゃほらるるん」

「電話のおしゃり終いなんだ」

「ふん、まあうんや ぞれやんや ぞれやんや」

「おれやんや」

「バカじゃなうの…タメに決まらるるん」

「臙子の子宮に俺の精液がびゅーびゅー注入される
じゅと想像してみなも ンクンクもあるだろ？」

「…ズン…別に…ンクンなるとしては…」

「大きくなるとお腹をなでなでしてはあ〜」

「はあ？ん、ん、ハタの子供なんて絶対・ヤ・ヤ」

つながったまま小休止 お話中の2人



「話し終わるけれど 彼氏君には嫁子が如女喪失
しちゃんだって事 中の教えとおけたの？」

「アカデシキ...言ハクハ...カ...なる」

「じゃあ 1人じゃ嫁子が俺と野合セシクス
して居事かしてはならんわ？」

「...おだり共ニ」

「556~」

「...うんねはならんじやんと...
なび~言ハクハ...事聞かならん アシクシクシク」

「おカハクハ~ 事ハ聞ハクハナラナカ」

「おハ 557シキ...おカハクハナカ」

「おカハクハナカ」

寧々、菓子と同じように髪花も催眠術の〈餌食〉になってしまっていた。三人目のおじさんロロも工夫を凝らしてリア充カッパルを弄んで楽しんでるぞんだ

「髪花様〜」とほめて彼氏をよじ取られたロロは
「眠れちゃダメなカッパルだ〜」

「そんな心配をあなただけがする必要はないの」

「<<< >>>」とそれどころか「それだぞ」



「ほの おだわだしてなうでせうとせよあなただの
街の部屋に案内してあげよう」

「あ、ほの」

髪花はロロの事を奴隷とか
女王様気分ですべてやるが
美質ロロのやつほじくじとを
やらせているだけ



「今日はコシを私の尻に突っ込んでおきなからよ」

「えーそれってセックスするって事…
それは彼氏さんの仕事なんでしょう…」

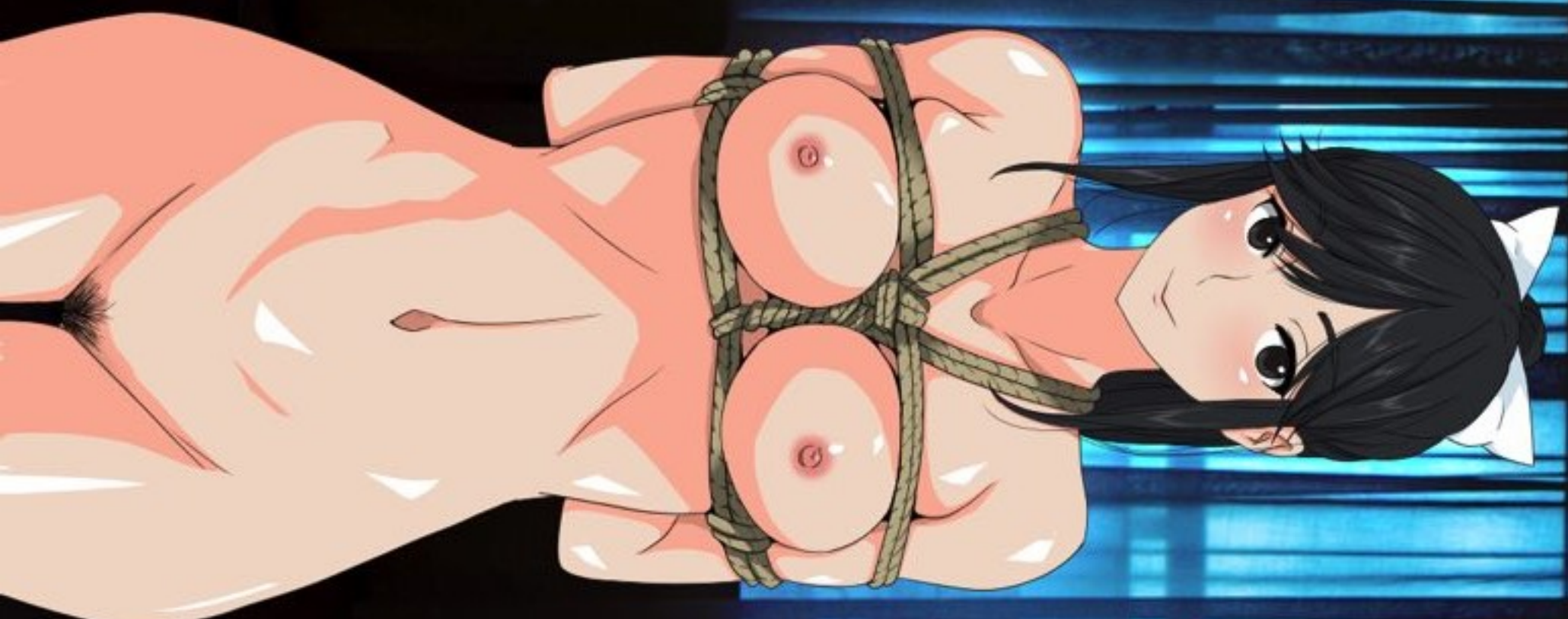
「その彼氏様からの指示なの

あなたみたいなの浴えないおじさん部の部屋で
床にダンボールを敷いて
その上で最低の処女喪失をしてるのよ」

「あ…ああ、その…その…ははは…」

「寝てしま〜 <私のおちゃんを愛花様に
捧げます>でしてよ」

「ぞ、捧げます 愛花様に私のおちゃんを
捧げます」



「なにやあ 私が泣いても失神しても臍内に3回射精
するまで犯すのをやめだろクズめ」
「3回...それや丑じゃとてんだは妊娠したやにかわ...」
「それが彼からの命令なの...うっつかの臍内に射精するの...」
「さあ」
「わ、わかのオシ...」

「あ、あ、あ >>>」

「んっ...な、なかなが縛るの上手じゃない...うっ感じも」
「初めてなのに...うっかなりっんはリードは感じてっうのかは？」
「おんっ...何度も言わねえけど、彼の指示なの、おなだは
私の命令に従ってっんはっうの...わかった？」

あつさの処女を奪い、痛みを感じているであろう愛花の膣内をこねくり回す口口

「大丈夫ですかあ 愛花様あ〜 まだ 中出ししてないのにちろ
「ガクガクしてますけど？ねえっ」

「ぶほっお…おおお…」

「ほらほら〜ヌ○コ壊す勢いでいきますよお」

「んふらーっ！んふららら…っ！」



「ああ…出そう…愛花様…出しますよ…愛花様の新品ス〇コに
俺のくっさいザーメン…んおっ…」

「んっ—————っ！！！！」

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「ふら～きもちいい……ホントによかったんですか～
俺の精液でオマ〇コ汚染しちゃって」

「ふらら……ふらら……ふら～……」

「まあ今更言っても意味ないか……じゃあ後ニ発だしますね～」

「ん？……んっ……んっ……」

んっ

んっ

んっ

んっ

「あ～ なんか出てますよ～愛花様…大洪水だ はははっ」

「んお…んびり…んびり…ん ちびり…」



「アィヌスク取りますよ...あぢ〜 すごい顔...
なんか限界っほいけだ、あと少しで3発目出ますからね〜」
「.....お.....」

「なんか大きなオナホールみたいですよお
愛花さま はははっ」



「ふ〜…約束の3発目ですよ〜 お〜い 愛花さまあ〜」

「……………あ……………」

「ほろっ…ドクドク注入されてるのわかりますかあ〜??」

「喜んでください、愛花さまの新品ヌ○コの
具合がいいからまだまだ出せそうですよ!」



「M君…わたし ちゃんと汚いおじさんとセックスしてきたよ…」

「俺の言ったとおりにしてきたんだ、ちゃんと女王様みたいな態度とった？」

「うん それとちゃんと3回 中に射精させたよ」

「そう…ご苦労様 どうだった？苦しかった？」

「うへん…全然平気だよ(まあ…すごかったけどね 途中からあんまり覚えてないし)」

「じゃあ そのおじさんとまたイロイロしてきてほしいって言ったらどうする？」

「あなたが そうしろって言おうなら…….してくる」

彼氏のM君は □□に催眠洗脳されていて

□□の指示を代弁している人形にすぎない

そして愛花はM君の命令には絶対服従し

それに喜びを感じるようにされちゃってます

「さあ、さあ、さあ...」

「さあ」

「...さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...さあ...さあ...」



「さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...さあ...さあ...」

「さあ...」

「さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...」

「さあ...さあ...さあ...」

「大丈夫！ 絶対に寝落ちしては
お母さんや先生にバレないよ」



「はあ... はあ... 大丈夫か... 大丈夫か...」

汗と精液を下着に拭いておげんごうに固定する

「ふっ 甲斐ない
いい眺め、ん？
どうしたの？」

「な、なんか くんは格好で
固定されてると...
恥ずかしいなっておぼえて」

「ははっ なんだ、變々おやの
ア○口は何故おしっへり取てるの
味も匂いも知ってる男だと俺は」

「なにがなんだよ...」

「でか、恥じないから何の感
ずいっせいで帰るぞ」



「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」

「お尻の感触が最高だ」



「いじわるしてゴメンね…チヌのおちん○ん入れて
いっぱい精液だすかゝ ゆるしてね」

「ふあっ…あ…あ…あっ♡」

「うあ〜 やっぱ 寧々ス○コ きもち〜」

すず
はな

お
ちん

「うあ…吸い付いてくる…」

「はあ…ああ…あ」

「あっ…あっ♡あっあっ…♡ あっあっ♡あっ…あっ…
あっあっ…あっ♡んあっ…あっ♡」

「俺のおちん○ん きもちいい!？」

「あっ♡…き、きもち…いい…
きもちいい…あっ♡…」

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

あ♡
あ♡

ん♡
ん♡

あ♡

あ♡

「俺のおちん○ん好き?」

「う、うん…す、すきっ…
おちん○ん…すきッ」

「んおあ...マ○コに出しちゃうよっ いいよね？」

「あっ...あ、いいよ...マ○コに...だ、だしてっ」

「んああ...あ〜 尻ら〜〜きもち〜.....」

「あ...あっ...ああっ...♡...ああ〜」

ビク

ビク

「あ...ああっ...まだ ビクビクしてる...
はああ...いいはい...ナカに...あっ♡」

あははは
あははは
あははは
あははは



「満足しました？」

「まあね…でも寧々ちゃんとなら
まだまだ出そうと思えば出せるよ」

「あれだけ出せば十分でしょお…もう～
私の方が 壊れちゃっう」

「大事な寧々ちゃんが壊れちゃごまるな…
じゃ、デザートにおっぱい吸わせて～」

「ふふっ どうぞ」



「寧々ちゃん…好き」 「もう何度も聞いたよ ふふっ」

「冗談じゃなく 本気でなんだけどな〜」

「わかった わかった」

「彼と別れて俺のモノになって…」

「……………もう…困らせないで…」

「俺のごと嫌い？」

「…きらいじゃないけど…」

「おっぱい好きだから 吸っていいから
…今はそれで我慢して」

「コレ 俺専用のおっぱい？」

「ん〜 赤ちゃんが産まれたら共有かな ふふっ」

「出しまくったから・・・眠くなってきた・・・」

「お～ヨシヨシ・・・朝までそばにいてあげる♡
安心して寝んねしていいよ」



寧々の体温 匂い おっぱいの感触に包まれながら
至上の眠りを貪るxx

○○は寧々のおっぱいを堪能した

「おっぱいもういいの？もっとちゅっちゅしないの？」

「うん、ひとまず満足したよ」

「ふふっ それじゃあ 今度は
せ〜しぴゅっしぴゅしましよらか」

「するする」



「うふふっ　すご〜い…・噴水みたい」

「だってすげ〜気持ちよかったんだもん」

「それにしたってすごい　なんか勢いも前より凄くなってる気がする」

「だって　寧々ちゃんがそばにいるだけで嬉しいからさあ〜」

「え…」

「好きで好きで愛してる人にバイズ」
されれば　勢いも増すよ」

「ま、また　そんな事　言っで〜」

「…………」

「ちよ、ちよと
黙らないでくださいよ…」

「本気にしてくれていいかなね…
俺が愛してるって事」

「oooooooo」



「寧々ちゃん…今日はずっと一緒にいてくれる？」

「え…きよ、今日は…彼の所に帰らないと…すぐに戻るって言っちゃったし、ゴメンなさい」

「ええ…もう帰っちゃうの？」

「そんな悲しそうな顔しないで…それに

私は○○君の彼女だし…そんなにワガママ言わないで…ね♡」

「ね～ やっぱりさあ 彼に俺たちのこと正直に話そうよ…隠してるほうが彼に酷い事してると思うよ」

「え？ひ、酷い事…私が…彼に…？」

「うん ちゃんと話して納得してもらったうえなら コソコソしたり嘘ついたりしないでいいんじゃないの？今日みたいに急いで帰らないで 好きだけ一緒にいられるし」

「で、でも…知らないほうがイイ事もあるでしょう？」

「別に寧々ちゃんを彼から取り上げちゃらわけじゃないし

君たち2人はずっと彼氏彼女でいるわけだから…まあ話を聞いた瞬間はちよっと嫌な顔をするかもだけど…」

「…うん…」

「とにかく 寧々ちゃんが心配するようなら事にはならないように上手く俺から伝えるから」

「…そ、そままで言うなら…」

というわけで ○○に今までの事やこれからどうなるのかを伝えるxx
当然だが催眠済みの○○はキレたり別れるとわめいたりもしない
きつつい事実立ちくらみするくらい

「な、なんとなく…そんな事になっっているんじゃないかと思ってましたよ…」

「で、どうする？ 寧々ちゃんは君が一番好きで別れたくはないって言うけど？
俺は彼女のこと愛してるから君が捨てるって言うなら俺がもらうけど」

「別れるわけじゃないですよ！…ぜ、絶対に別れませんよ！俺だって愛してるんだから
あ、アンタには渡さないっ…」

「そっか〜 ちょっと残念だけど 安心もしたな」

「は？」

「君が別れるなんていったら寧々ちゃんが悲しんじゃうからね、君らの関係を壊さないって
約束だったし。でも君も器の大きな男だね〜、普通だったらガチで切れたり別れたり
するのに…さすが寧々ちゃんが惚れた男って感じだな」

「別にそんなことないです…ぶっちょやけ悔しくておかしくなりそうなんですから」

「ま、それがあたりまえだよ、何も感じなかったら好きじゃないってことだからね…
まあとにかく これからは君にコンコンしないで堂々と寧々ちゃんと…んふふ
頻繁に彼女を貸してもらおうことになるけど、よろしくっ♪」

「くっ…」 「そんな顔しないで〜仲良くいこうよ〜 同じ女を愛する者どうしさあ〜」

このように ○○と寧々と××の関係は
さらに異常なステージに進展した

○○は悔しさと悲しさと少しの怒り(興奮?)と困惑がごっちゃんになっていた
寧々は胸の痛みと同時に安堵もしていた



「あんなに可愛らしいお嬢さん、お会いできて本当に嬉しいです...」

「お会いできて嬉しいです...」

「...うん...」

「はい...でも今日は俺が予定があるので...今日は彼氏さんと一緒に帰りますよ」

「今日はいいから...さっさと帰りたい」

「はい...はい...」

「...うん...」

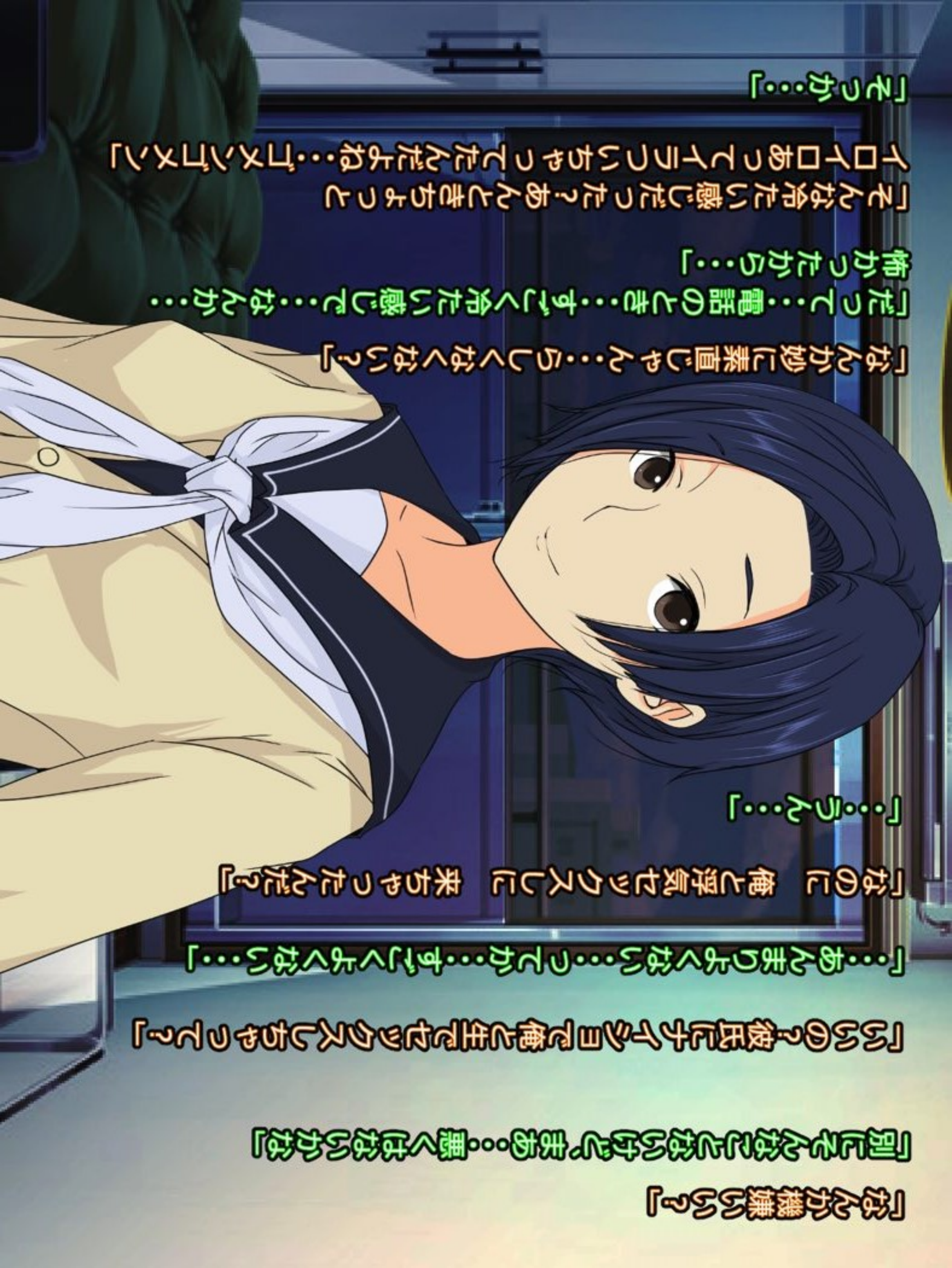
「はい、さっさと帰りたい...お嬢さん、お会いできて本当に嬉しいです...」

「はい...さっさと帰りたい」

「はい...さっさと帰りたい...」

「はい...さっさと帰りたい...」

「はい...さっさと帰りたい...」



「...か...」

「...か...」
「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」

「...か...」



「お尻から挿入して頂いて...母さんお尻から挿入して頂いて...」

「は...は...お尻から挿入して頂いて...お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...」

「お尻から挿入して頂いて...お尻から挿入して頂いて...」

「んはっ…あっ…やば…い、まっ また…イッ…イッ あっ♡」

「またイっちゃうの？早くない？」

「だって…あっ♡ きっ…きもちっ いい…か…らあっ…」

「奥まで突いちゃうぞ〜」

「んああっ！あっ！あっ！あっ！！」

ムニムニ

ブルブル

ゴクゴク

ビッ

ムニムニ

ムニムニ

んはっ！あっ♡
んはっ！あっ♡
んはっ！あっ♡
んはっ！あっ♡



「はあ……はあ……はあ……」

「そろそろ俺も出すぞ～ 中に出しちゃらからな」

「はあ……はあ……な、中じゃなきゃ……ダメなの？」

「ダメ～ 凜子のま〇こに俺の精液の味を 覚えてもらわなきゃいけないからね」

「こ、今回だけだからね……ほんとに……今日だけだからね……」

「わかったわかった 顔見ながら出したいから こっちに向き直って……
ああ……ほら早くこっち向いて もう精子出そうだから……」





「はいはい、お話を聞かせてください」

「俺の糖子で大きくなったお話を聞いてもらいたいです」

「はいはい、お話を聞かせてください」

「はいはい、お話を聞かせてください」



「はいはい、お話を聞かせてください」

「はいはい、お話を聞かせてください」

「はいはい、お話を聞かせてください」

「はいはい、お話を聞かせてください」

「はいはい、お話を聞かせてください」

思いっきり膣内に射精された凍子

今日だけとは言ったものの 当然そんな事になるわけはなく
△△の精液を注ぎまくられることになる

凍子を孕ませる気100パーセントの△△は
ピルの事などを凍子の認識から消し去っている

ちなみに凍子の彼は 彼女の変化にまったく気づかない催眠を
施されている

「私のお尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね、お尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね、お尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね...素直な人は嫌いなわね」

「お尻もどきどきするわね、私を妊娠させるのだから」

「お尻もどきどきするわね...」

「私の彼がね、お尻もどきどきするわね、無様に妊娠を願っているのだから、お尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね...お尻もどきどきするわね...」

「お尻もどきどきするわね、お尻もどきどきするわね」

「お尻もどきどきするわね、お尻もどきどきするわね」





「うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...」

「うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...」

「うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...」

「うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...うん...」

「うて...うまて...」

「うて...」

「うて...うまて...」

「うて...うまて...」



「はあ～…でるでる…」

「ん～…ん～…ん～…」





「お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お友達、みんな大好きです」

「ママ、パパ」

「ママ、パパ、お兄さん、お姉さん、みんな大好きです」



「ママ、パパ、お兄さん、お姉さん、みんな大好きです」

「ママ」

「ママ、パパ」

「ママ、パパ、お兄さん、お姉さん、みんな大好きです」

「ママ、パパ、お兄さん、お姉さん、みんな大好きです」



kiss
kiss

kiss
kiss
kiss

「ん」

「おはようございます...おはようございます...おはようございます...」

「.....~~~~~~」

「.....」

「.....」

「.....」



自分の口で吸って吐いて離れたい花は少し驚く

「〜」

「…花は嫌いな顔もする〜」

「〜」
「〜」
「〜」

「〜」

「〜」

「〜」

「〜」

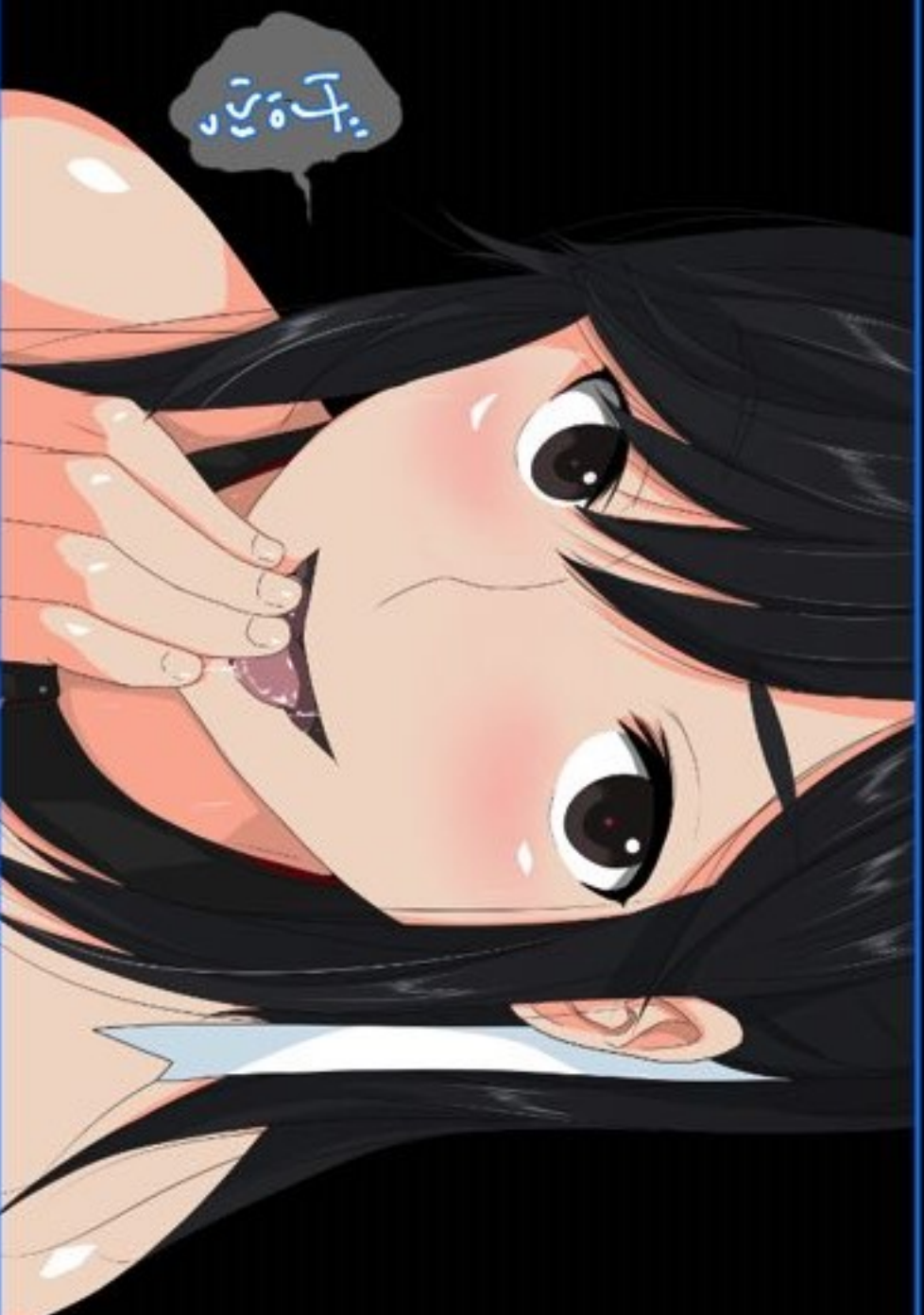
「(〜)」

「お母さん〜 花は嫌いな顔もする〜」

「〜」
「〜」
「〜」

□□はこの日 愛花のス○コに出しまくるつもりだったが

□□のち○ぽに吸い付いた愛花にゲームを搾り取られまくってしまった



□□は 愛花にフェラやゲーム大好きという催眠をかけてないので
もともと彼女は淫乱でゲーム好きの変態だったようだ

「と言うわけで今日は○○君にも参加してもらおうことになったから、よろしくね」

「あの…わざわざ○○君に見せつけるような事…しなくてもいいんじゃないですか？」

「○○君は俺達がどんな風にセックスしてるのか気になってしようがないんだよ、しっかりと近くで見てもらったほうがいいんだよ、ねえ○○君？」

「……………そ、そうですね……」

「ほら～、それに膣内射精のとき彼の許可をもらってから注入とか面白そうじゃん
寧々ちゃんも彼の許可があったほうがいいんだよ、俺の精液を受け止められるでしょ」

「ん～…まあ、そう…ですかね……」

「○○君にも都合があるから、毎回必ずそばで見てもらおうっていうわけじゃなくてさ
あとで写真や動画を見てもらおうって形でいいじゃん。もう隠す必要ないんだから
俺たちの愛し合ってる姿をちゃんと見てもらおうよ」

「べっ、別に愛し合ってるなんかないでしょ…お願いを聞いてあげてるだけです！…
ち、もうっ…彼の前で誤解を生む様な事言わないでください……」

「ああ、そうだったそうだった 俺からの一方的なもんだった、ごめんごめん」

「それじゃ寧々ちゃんは先にいつもの部屋に行ってて」

「え?…あ、はい…」

「それじゃこれから俺は寧々ちゃんとセックスするわけだけど…

好きなように見ていいけれど 彼女にさわったりして邪魔しないでね、

あと彼女がキミに〈許可〉を求めたときは やさしくOKしてあげるんだよ
わかったね?」

「俺と寧々さんに〈お願い〉をしている立場なのに…ずいぶん上からなんですな…」

「いやいやこれは別に命令じゃなく〈お願い〉だから」

「わ、わかりましたよ」

「ありがとう、ああそうだとココで少し時間をつぶしてから部屋に入ってきてよ」

「ど、どうしてですか?」

「そりゃ彼氏の前でセックスしなきゃいけないんだよ、いつもより緊張してる
だろうから気持ちほぐして テンション上げてあげなきゃ」

「あ…な、なるほど…」

言われた通り じばらしてから そとそ二人がいる部屋に入ると...



覚悟していただとはいえ その光景は○にはあまりに衝撃だった
寧々の裸を見たのも初めてだったし 自分としたキスとは明らかに
違う濃厚なキスをし 気持ちよさそうに吸いあつた二人の様子は
頭が熱くなり胸が苦しくなる



二人の唾液を混ぜ合わせる
その舌を絡ませる

そして再び唇を重ね合わせ
○にお聞けるほどの音を出し
唇を吸いあつてる



「...」

「おちんちんが...」
「おちんちんが...」
「おちんちんが...」

「おちんちんが...」

「おちんちんが...」
「おちんちんが...」
「おちんちんが...」

「...」

「おちんちんが...」
「おちんちんが...」
「おちんちんが...」

「...」

「おちんちんが...」
「おちんちんが...」
「おちんちんが...」



ずるずるー

んははは……

くそっ……おんほん
寧々さんの喉の奥まで
突っ込みやがって……
あんまり無理させるんじゃ
ねーぞ、このクソが……

ぐわぐわー



んっ…kiss…

ぐわぐわー
寧々の唾液でぐわぐわー
なっている

「...おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」

「...おれは...」

「おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」

「...おれは...」

「...おれは...」

「おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」

「おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」

「おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」

「...おれは...」

「おれは、この世に生まれてから、ずっとこの世に生きてきた。...」



「...あーん」

「...おっぱいを舐めたい...」

「おっぱいを舐めたい...」

「...ん...」

「おっぱいを舐めたい...」

「あーん」

「ん」

「...おっぱいを舐めたい...」

「...ん」

「おっぱいを舐めたい...」

「ん」

「おっぱいを舐めたい...」



おんこを膣から抜きただ××のお○ほは
膣々の愛液でぐっしょりなってる
再び膣々の体内に埋め込まれてい



目の前で大好きな膣々が自分以外の男のお○ほを
挿入され気持ちよさそうに味わう姿を見せられている
○君は 悔じさ、悲じさ...そして羨まじさでおかじ

××に踏った膣々が上下に揺れるたび
にちゃにちゃと水のほい音が聞ける
結合部分から

あ。あ。あ。
あ。あ。あ。
あ。あ。あ。

あ。あ。あ。
あ。あ。あ。
あ。あ。あ。
あ。あ。あ。
あ。あ。あ。



〇〇君にやさしい言葉をかけてもらった事で安心した寧々の発言は
いままですぐ押さえつけていたものを吐き出すように
少しづつ 大胆に 遠慮のないものになってくる
「デート中に あっ♡ 急にxxさんに
呼び出されたこと…何度か…あつたよね」
「え、えん…」

「心配する事はない…とか言ってたでしょ…わたし」
「…えん」

「でも あの時もごうやってxxさんとセックス…あっ♡
してたの…ウツついて…ゴメンね…」

「…い、いいよ…」

「電話してた時も…ごうやって…おちん〇んを…入れながら
話して…たんだよ…」

「○○君…わたしの…オマ○コに…xxさんの んっ…あっ…♡
おちん○んがっ あっ…お、奥まで…来てるのっ…!」

「…○○ん…」

「ず、すごく…キモチいいのっ…xxさんの
おちん○んが…きもち…いいのっ…」

「お、わたし…この人に…いっぱい調教されちゃったの
…この人の精液の味も覚えちゃったし…オマ○コの
中にも何度も…何度も…あっ♡射精されちゃったの…」
「ね、寧々さん…」

「セックス…好きなの…xxさんとのセックス…
大好きに…させられ…ちゃったの!」



〇〇がそう言い終えると 寧々はビクビクと痙攣し
XXにイカされた...

「ほら これが俺のおちん〇んで 寧々ス〇コガ
イっちゃった顔だよ...よく見ておげで」

ズル

ズル
ズル

ズル
ズル

ズル
ズル

ズル
ズル

ズル
ズル
ズル

ズル
ズル

「君の大事な寧々ちゃんとは...んお...
俺のち〇ほでさんなにビクビク感じてくれて...
ホントに可愛いよね」

「はあ…はあ～…うふ…いかされちゃった…」

「寧々ちゃん…彼氏が見てんのに潮吹きすぎ…」

「やだ…なんか…はずかしい…」

「寧々ちゃん、俺もそろそろだから
彼にお願いしてよ」

「あ…うん…」

ずんずん

はあ

はあ

「あのね…xxさんが私の膣内に精子…出したがってる…
オマ○コに中出し…させてあげて…いい？」

「に、妊娠しちゃうよ…寧々さんはいいの？」

「大丈夫だよお…そんなに心配しないで…
中出しさせてあげて、お願い！」

「わ、わかったよ…寧々さんが…くっ…いいなら…」

「あゝ……ん……〇〇君……お、わたし……危険日のオス〇コに中出しされちゃった……」

「妊娠しちゃうよ……寧々さん……」

「いまオス〇コの中……xxさんの精液で……
いっぱいになってる……あゝ♡」

「xxさん……いつまで入れてるんですかっ
早く抜いて……もういいでしょ！」

「ぢメだよ～ このあと余韻を^{ビク}楽しむのが大事なんだから～
しばらく寧々ちゃんにち〇ほ入れたままイチャイチャしたいし……
ああ、そろだ、俺と寧々ちゃん汗かいたからさ、なんか飲み物買ってきて」

「な、なんで そんなこと……」

「こんなに汗だくになった寧々ちゃんに水分補給させてあげないの？」
「わ、わかりましたよ……」

2人は膣内射精の余韻を味わうように 性器を結合させひとつになっただまま唇をも重ね合わせ始めた
〇〇がしばらく呆然と見つめていると

「んっはあ…どうしたの？飲み物買ってくるまで
寧々ちゃんにち〇ほ入ったままだよ？」

「お、わかっていますよ…」

「まあ俺は寧々ちゃんとなら
何時間でもこうしてられるけどね」

そう言うと再び寧々の唇に吸い付く

「くっ………」

んっ♡

んっ♡

んっ♡

〇〇は静かに後ずさりして退出し

飲み物を買いに出かけた…

買い物を買ませ急いで戻る○○、先ほど言ったとおり
まだひとつに繋がったままイヤイヤしている寧々とxx

「ああ 早かったね…いったん休憩しよっか？
あ、その前にもう一回チューして、チュー」

「らん」

「飲み物買ってきたんだから…早く離れてくださいよっ！！」

「ふふっ わかったわかった
彼がヤキモチやいちゃってるから
離れよっか、寧々ちゃん？」



「.....」

「.....」
「.....」
「.....」

「.....」

「.....」

「.....」
「.....」

「.....」

「.....」

尿道のなかの精液も
吸い取る事々

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」
「.....」



「うん、いい感じ」

「お、口、あ、
いい感じ」

「ん」

「お、いい」

「お、いい感じ...
お、いい感じ...
お、いい感じ...
お、いい感じ...
お、いい感じ...」

「ん、いい感じ...」

「お、いい感じ...
お、いい感じ...
お、いい感じ...」



「んんん…おもしろ」

「おもしろいよお頂戴」



「んん…んん…おもしろ
おもしろい味がある」

「んん…んん…おもしろ
おもしろい味がある」

「おもしろいよ」

「うんっ…ごめんなさ…うっうっ〜」

「うんうんうんうん…うん うん うん」

「うん」

「…うんうんうんうんうんうんうんうんうんうん」

「うんうんうんうんうんうんうんうんうんうんうんうんうん」

「うん」

「…うん うん うん…うんうんうんうんうんうんうん」

うんうん

うんうん





میں نے تم کو

میں نے تم کو

میں نے تم کو

「...」
「...」
「...」
「...」

「...」



「うん」

「おっぱいを舐めたい...」
「おっぱい...」

おっぱいを舐める



○○回から○○回

「はあ...はあ... ○○君...わだし...まだ
おち○ちん...挿入されたやいな...」



「じゃあまだ挿入さすのホラ○に○ちん入らせて
おち○ちん...いかなあ 挿入さすよ?」

「...おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

「...おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

「...おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

「...おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」



「おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

「おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

「おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん、おっちゃん...」

寧々さんの耳元で何囁いてるんだ？

「んっ…んっ…あっ♡…うん…うん…
わたしも…あっ♡ふっっ…もっっ…あっ♡」





「あ♡…あ♡…いぐら♡」

「お…あ…いぐら…ま、また…いぐら…」

あ♡
あ♡
あ♡

あ♡
あ♡

あ♡

あ♡

あ♡

あ♡
あ♡
あ♡
あ♡

「はあ…はあ…この人お満足してくれたい…
妊娠しちゃうかも…ふふっ♡」

「はあ…はあ…この人も満足してくれたい…
シヤウー浴びてくるから待ってて、そしたら一緒に帰ろっ 〇〇君」

「う、うん」



普段のテンションに戻ると なんとなく～く二人の間に微妙な空気が流れる

「い、いやあ～ な、なんか…えっと…」

「えっ！えっと…なんか私…すごい事言ってた気がするけど…
変に舞い上がってたって言うか…
その…勢いで言っちゃってるというか…
本心じゃないというか…その～」

「そ、そりゃあ 人に見せながらすることじゃないから…
変な感じになっちゃうのはしょうがないよ…」

「う…うん…ね、ねえ…ほんとは幻滅した？」

「するわけないよ…誰にも渡したくないって思った」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんとだよ」



二人とおじさんの異常な関係は続いていく

寧々たちと同じように凜子と愛花も異常な日々を送っていた...

「抱っっっしてズブズブするから
俺に抱きついて〜」

「んっ あっ…んっ んっ…んっ…」

「あ、そうそう ネコ「リン」の尻尾…
ケツの穴にぶっさすタイプもあるからなあ〜」

「そっ それ オカシイ
…でしよ…」

「なんで？」

「だ、だって…猫の尻尾はそんなところから
はえてない…じゃん…」

「ま…そうだけど…とにかく凜子のケツ穴
弄くりたいから…覚悟しといてって事だよ」

「…やだ…」

「ダメだよ、凜子は
俺の精子で妊娠するし
ケツの穴もズボズボされ
ちやうの！」



「んっ…んぶっ…ん…ん…」

「はははっ なんだよ凜子お
っんなっっっぱっっんごちゃんオキシシッ」

おっぱい
おっぱい

おっぱい
おっぱい

「おんおん、いい子だな凜子は…
産まれてくる子もいい子だとっらなあ」

「はあ…はあ…」

おっぱい
おっぱい

もっ~

もっ~



「無知」

「俺の腰中に挿れたいのよ」

「おはしゃぎ無知だわ」

「母ちゃんにだまされて…大ミソク
ちゃうわね…お掃除ノヒト…」



「うん…うん…うん…うん…」

「おはしゃぎ無知だわ 俺の腰中に挿れたいのよ」

「はるるん ヌーニー」

「すごく似合ってます〜 素晴らしいです愛花様」

「当たり前でしょー」

「髪型も素敵です〜」

「そう…衣装も髪型も気に入ったのね…」

「はる」

「つぎは もりんの髪型と格好は
「度々こなさね」

「ニューニーのドレスもか〜」

「別にあなたに気に入って欲しいわけじゃないし
それになんとなくイジワルしたくなかったから〜」

「ニューニーなあ〜」



「ぶぶっ っい顔するじゃない…なんでも言ってるけど
私のじと好きになっても無駄よ 私は彼の所有物なんだから」

「わ、わかってますよお…」

「その彼氏様がまだ妊娠してないのがっつて
ぐ立腹なのよ…」

「はあ…」

「今日は絶対妊娠するわようっ
危険日だし、あなたの汚い精液
十回くらぐらマ〇にだせば
孕むぞっせ」

「十発ですか…」

「精液でオマ〇に満タンにならなませ
もっとうすままで許さなかららぶぶっ」

「そだじやわいわいセシックスじゃよ…私の足の匂がばよいにおちのちん勃起するぞじや」

「あ、愛花様のパニー姿ですぞカチ」チです」

「あら…そだじや嗅がなくてうんうん…わいわい朝から寝ると蒸るぞじやおちだのじや…」

「あっー！」応嗅ぎます嗅ぎますっ」

「うんうん…」

「うん、せび嗅がせてください
愛花様のくっくっせう足裏の匂い」

「へっ、うん、耳が悪くなったのかじや…」

「あ、甘く馨しい愛花様の足」

「うん、よねえ、くさいわけないものね…じやあ好きだけ嗅ぎなわら」



「まだの ズボーンズはズボーン」

「はっ……はっ……おっ！興奮してます」

「ぶぶっ 鼻をつんつんしちゃおう」

「んあ……なんか……湿ってます……」

「満足したら言いなさい すぐにセックスよ」

「あ、はっ」

「あぁ…あぁ…あぁ…あぁ…♡」

「あぁ…あぁ…あぁ…あぁ…」

「な、なにしているの…押れただけで満足してないで…ち、ちっとな…ズブズブして…らっぱらっ…出しな…あぁ」

「大丈夫ですよ…ちっとな…発音が…あぁ…」

「ちっとな…ちっとな…ちっとな…あぁ…お、奥をグングン…ちっとな…あぁ」

「ちっとな…あぁ…」

「ちっとな…あぁ…♡」

あぁ…あぁ…あぁ…

「自目をむかなくてもマ○」 イケるんですおね

「はははっ まおね」

「じゃ、自目むいた愛花様も
好きですよ、怖らナイ」

「…おね」

「少し休憩いいますか？」

「少しだけよ」

おね

「アハハハ妊娠してる…私のM.O.T」

「いいいや 拡げてみてもわかりませんよ…
でも危険目にコレだけ申に出せばきつと妊娠してますよ」

「あ〜あ…あなたの臭くて汚い精液で孕まされちゃった
のかあ〜…ふふっ」

いちゃあ…

にゃ…

んあ〜♡

「しこたまぶち込んだんでごんごんあふれてきちやいますね〜
ほら愛花さま口あけて〜」

「んあ〜♡」

「あらら……この体勢は精液飲みづらいですか？」

「ごまじ……ごまじ……おじ……おじ……」

「んぶぶ どんどん飲まないと溢れちゃいますよ〜」



あれ以来 寧々とXXの交尾を見せ付けられることはなかったが
変わりに動画を見ることになった○○君

前半は 告白前

後半は 告白後で最近のモノだそうだ

「え？〇〇君に電話するの…いいけど…」

「おち〇ちん入れたままで…するの？」

××はうなづく

「もう～ しよらがないなあ…あんまり動かないで…
変な声でちゃうから」



「え？ラ、ラん…大丈夫…ラん」

「アハハ…わたしも…ラん…そらだよ…あっ♡」

「もっっ…急に動かないでっ」

「ん…んなんでもない…
ラん…ラん…心配しないで…」

「じゃあ またね…」



「んんんっ 緊張した？」

「し…しました…」

「〇〇君、なんか心配してた？」

「また…あなたと会ってるのか って」

「あ〜 かわいいそうに…ちゃんと書いてあげれば
よかったのに…」

「な、なんて言うの？」

「今××さんの生おち〇ちんがずっほり
入ってますって…」

「そんで膣内射精してもらいますって」

「だ…だめよ…そんなの…あっ♡」

「んんんっ」

「んんんっ」

「んんんっ」



「ゴウゴウ...ゴウゴウ」

「濡れた胸の感触が気持ちいい...」
「濡れた胸の感触が気持ちいい...」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「びしょびしょ」

「...ゴウゴウ...ゴウゴウ...」
「...ゴウゴウ...ゴウゴウ...」

「濡れた胸の感触が気持ちいい...」
「濡れた胸の感触が気持ちいい...」

「びしょびしょ」





「あれから〇〇君はどう？なんか変わった？」

「うん 電話の回数が増えたかなあ あと
すごく優しくなった気がする…もともと優しくかったけど」

「へへ よかったね、怒ったり冷たい感じにならなくて」
「うん」

「あ、寧々ちゃん 今日はごごじゃなくて
校内でオシッコするよ」

「え？大丈夫なの…勝手に入って…」

「大丈夫だよ 心配しないで」



「よし 寧々ちゃん専用トイレ設置完了！」

「しなら廊下を汚さなくていいねっ」

「持ち歩くの大変だけどね」

「人前でオシッコするのって…何度やっても
恥ずかしい…」

「そりゃそうだよ 今寧々ちゃんはすぐく恥ずかしい
事してるんだよお、すっぱんぽんで学校の廊下で
オシッコするなんて 変態だよ ど変態」

「やだ…あ…もうっ…そんな風にいわないで…」



「それじゃあ 放尿開始！」

「えーあ、はっ ちん」

「ははっ、ちゃんと寧々便器に入れないとダメだよ。ずいぶんはみ出てるよ」

「うーん、はっちん」

ちん。

「しかし…寧々ちゃん 丑しおね…」

「あ…我慢してたから…」

「え？…言ってくれればもっと急いだのに…我慢はよくならよ」

「いっ♡ぬらぶ♡ x x x x」

いっ♡ぬらぶ♡



「私がお前の乳を吸って
孕んだら××××××××××
お前さん……お前さん……」

「お前さん……お前さん……
××××××××××
お前さん……お前さん……」

「お前さん……お前さん……
お前さん……お前さん……」

「お前さん……お前さん……
お前さん……お前さん……
お前さん……お前さん……
お前さん……お前さん……」



「お母さん... 今度も...
妊娠の口... 産んで...
精液... 注がれる...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「×××... 産んで...
私の体... 産んで...
好きだから...」

「ん... 私...
お母さん...
相愛...
射精...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「おはようございます
おはようございます」

「...おはようございます
おはようございます...
...おは...おは...」

取り返しがつかないくらい大きくなった...



そして妊娠した彼女たちのおなかはず...

なんだかんだあって○○と寧々は
××が用意した家に1人で暮らすことになった

家賃や光熱費などすべて××が負担してべられている
しかも○○君の口座に毎月すごい額の生活費が
入金されている

「○○君はほんのら無理を聞いておいてくれると
寧々ちゃんに金銭的な不自由をさせたべはからい
だにんだ

しかし ○○君はまだまだに寧々に性的な事を
させておろさない・・・それよりもか井尺をわけて
おろさなべなつた

好きな人がいづもそばにいる お金にはよりのおれも
苦労しない・・・でも 寧々ちゃんのだら事はできな
い・・・いけいけ苦しいとわねからい状況になっている

今日お××が1人が暮らす1の家にやってきました

××と輝々の1人きりで部屋の途中で何か
話している...〇〇は気がなごって部屋の外でウロウロしてるよ
輝々が部屋から出てくる





そして寧々は××が待つ部屋に入っていた
入室するときの横顔が おのずかしく嬉しんでいたのが
〇〇君は気に入った

「ん？」

「さあ？」

「それをクハクハしてからムロムロしてスミヤウすれば眠れる？」

寧々はスミヤウしてハジを脱いで〇〇に渡す

眠れたら？……どうかな？……」

「まあ……ムロムロしたの？ 私でも人がサウナスがあるのから気に入って

「ん？……ホントに無理じゃあサウナスだよ……」

「ん？別にそんな事はなからだよ……」

「なんか機嫌がら？」



「...おん...」

「...おん...」

「...おん...」

「...おん...」



「...おん...」

「...おん...」

「...おん...」

「...おん...」

「...おん...」

「そんな俺のこと好き？」

「あ♡好き♡…xxさん…愛してる♡…愛してるの♡」

アハハ

お母さん？
お母さん？
お母さん？

アハハ
アハハ
アハハ

アハハ
アハハ
アハハ

アハハ
アハハ
アハハ

「アハハ でも○○君の前ではそんなこと
言っちゃダメだぞ、彼が寧々ちゃんと一緒にその腹の
子供育ててくれるんだから〜」

「うん♡わかってる…」

「寧々ちゃん」

「ん？なあに？」

「ア〇〇気持ちよかった？」

「ふふっ……うんっ♡」

「寧々ちゃん」

「ふふ、なあに……ちゃんと聞いてるよ」

「俺も愛してるからね」

「え！……もうっ……ふふっ♡」

FIN

**ここからは寧々と××が自分たちのハメ撮り動画を見ながら
トークしているという状況です

「ねえねえ…コレもう彼に見てもらったの？」

「いや、まだ…また俺が寧々ちゃんを弄繰り回しているのが気に入らなくて
ご機嫌を損ねちゃったときに渡そうかな〜と思ってる」

「そうね…彼は私が××さんと仲良くしているとヤキモチやいちゃうから
…そこが可愛いんだけど ふふっ」

「この制服プレイのときってもう寧々ちゃん
妊娠してたっけ？」

「ん〜…どうだったかなあ〜 まだだったと思うけど」

あはっ…

ん…

ウエイトレスさあごん

「もろ…私のお尻は呼び出しボタンじゃないの!」

「は、はっ…注文ですか」

「いめんめん 寧々ちゃんのお尻のむっちりデカ尻見ると
っい…ピシヤピシヤ叩きたくなっちゃうって…」

注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「もしおち○ちゃんイっちゃんそりなんだけど…
このままいいですかね？」

お、お客さま…膣内射精は…
オーダーされていませんが…

んっ♡ あんっ♡

んほ♡ っ♡

「それじゃ追加で」

「が、かっ♡まごまごした…♡」

「寧々ちゃんのケツの動き…すっ♡こね」

「気持ちよくっ♡てあげようっ♡」生懸命なのっ♡



注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「んあゝゝゝ出た出たあゝゝゝあれ
オマ○」絶頂はオーダーしてないけど……」

「ち……サービスです……」

あゝあゝあゝ

あゝ

あゝ

あゝ

「ケツ穴ヒクつきもですか？」

「そゝちららもサービスと……なってるまじあゝ」



注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「ずいぶんサービスがいいので
また利用したいと思います」

「あ、ありがとうございます…
ま、またの…ご来店…お待ちしています」

「それじゃお会計のほうおねがいします」

「は、はい…お掃除フェラ5分になります…」



注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「でもやっぱりやって動画で見ると お掃除フェラでお会計って……ほんとにバカっぽいね」
「でも寧々ちゃんの好きなことやらせてあげてるわけだから、お金と似たような価値があると思うんですけど」

「ぐっぐっしに好むじやなごっ……」



「あ……」全裸より恥ずかしいのよな……」

「蒸れ蒸れで汗くっついて最高だよな」

「まあ、くわらうが言いつつ」

もう一度と着てあげないっ」

んっ

あっ

あっ

あっ

んっ

あっ

んっ

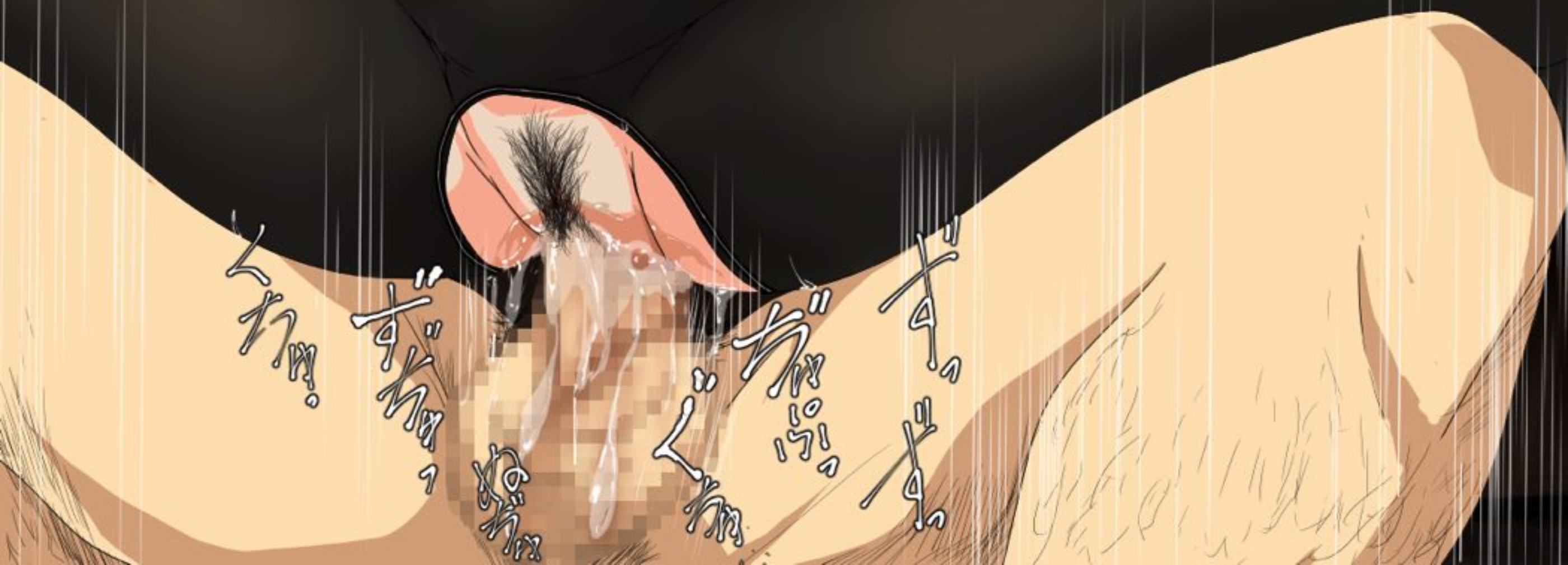
「あ、ゴメンゴメン……」

あの……くっさいけどくっついてくなくて……」

えっと 寧々ちゃんの汗臭いニオイは

ち○ぽギンギンになるといっつか……とにかくくっついて最高って事」

「んっ、もういいわ……好きならまた着てあげる」



んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「あ、俺も寧々ちゃんにくっさくしてグチユグチユのマ○」にイカされちゃったみたいだね」

「M×Mさんの汚い精子を中に吐き吐きしちゃって…いやだわ〜 体の中から汚されちゃって…感…」



「その汚い精子で寧々ちゃんはこんなお腹ぽっころの姿になっちゃったんだよねっ」

「ほんと困るわあ〜 私は○○君の子供を産んであげたかったのじ…」

「ぶぶぶぶ」この時ドアの向いで彼もそう思ってたよ ねっ」



拡大

拡大

「あく 精液があふれちゃってる…もううう〜」
「全然おさまらないんだから…ホントに困ったおち○ちん」

「でも精液でグチヨグチヨマ○」かき回されるの好きでしょ？」

「好きじゃないですよ〜 臭くて汚い精液を早く洗いたいの〜」
「あくやだやだ」

あゝ

あゝ

あゝ
あゝ
あゝ

あゝ

「…そうだったんだ…じゃ今度から
かき回すのもうやめるわ…」

「…うそ」

「え？」

「…好き」

「…知ってた ふふっ」

びん

びん

びん

んわ

す

んわ

んわ

んわ

んわ

「ねえ…」

「ん？なに？」

「こんなの見てたら…したくなってきた…」

おしまい

次のページからは おまけシリーズです

「ねえ、彼氏はまだ気がついてないの？自分の彼女が他の男の精子で妊婦にさせられちゃったこと……」

注△凛子の彼氏は催眠で気がつかないよ(´▽｀)なわて(´▽｀)な

「え？……うん……少し太った？って言うてたけど」

「鈍感というか暢気というか……でもそんな彼が好きなんでしょ」

「ぶぶっ そうだよ」

「ほんとに彼の子供欲しかった？」

「あたりまえじゃん……うたぐ……ほんとに子供産まされんのは思わなかったよっー」

「あれ……もうその格好はしてくれないんじゃないか……」

「そうだったけ？あなたのことなんてどうでもいいから忘れてたわ、それにスーツがマタニティタイプだから厳密には同じじゃないし」
「ふふっ」

「なんか」機嫌ですね」

「彼がね、俺の命令だからってほんとに他の男にそんな無様な姿にさせられちゃうなんて……可愛いヤンキー」
「っす」
「っす」

「な、なるほど……それで機嫌がいいんですね」



「この子産んだら また俺の精子で
妊娠してくれますか?」

「んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…
それね…それね…それね…」

「彼氏さんがダメって言うても
愛花様にはいっぱい俺の子供
産んで欲しいんですよー!」

「だ、だめっ…彼がダメって…
言ったらあ…だめ…んっ…んっ…」



「そろそろ産まれそらですね」

「んっ」

「本当は彼の子供を産みたかったですか？」

「……………」



「産まれてくる子が女の子だったらさ〜 どうやって
寧々ちゃんと一緒に散歩させようか？」

「だめっ、こんな恥ずかしいこと この子にはさせないからね」

「あららら…残念…」

「〇〇君と大事に育ててるんだから…
あなたのお願いは私が聞くから、それでいいよ〜」

「そうだね」



「そのお腹、誰の子が入ってるの？」

「え〜？知りたいの？」

「うん」

「ふふっ 貴方と私のあかちゃんでしよ〜♡」

「ど〜してそうなったんだっけ？」

ちゅん。

「あなたが私のオマ○に おち○ちんズプスプして
何度も何度もピュッピュッしたからでしよ〜♡」

「あ、そうだったあ〜、○○君の彼女なのにならりすぎちゃった……」

「ホントにしょうがない人♡」

じゅわ
じゅわ





「何人か見てるぞ!」
「おはははは!」
「おははは!」

「おははは!」
「おははは!」
「おははは!」
「おははは!」
「おははは!」

特別編

本編とは関係のない独立したものになってます

シヨートでちよっととハードな内容になってます
鼻フツク スパキンキング ポテ腹 乳首ピアス
外道なセリフ・シチュエーションなどなど

気がつくくと彼女達は何故か陸上用のウェアを着せられ 目隠しをされ拘束されていた



何がどうなったのか？困惑する三人 近づいてくる気配を感じる

「みんな気がついたみたいだな…えっと困惑してると思うのでこれからいろいろ説明します、あ、君達からの質問や拒否などは受け付けられないので静かに聞いてください」

そうは言われたものの
フウフウ ガチャガチャ取り乱す
三人、しかし男はかまわず続ける

「残念ですが君たちはもう元の生活には戻れません…ココで肉便器として壊れるまで使われることになります」

「フワ〜?」「…?」「んん〜?」

「ピンと来ない子がいるみたいなんです具体的に一例を挙げると、えっと…いろいろさせられるんですけどわかりやすいのは…オマ○に○ち○んをスポスポされまくって中だしされます、当然避妊はしないので妊娠しちゃいます」

三人は全身で拒否の意思を表明する

「ああ、そんなに拒否表明をしても無駄だよ、現実を受け入れて肉便器として頑張りましょう
僕がサポートとメンテナンスを担当するんで、これからヨロシク」

「んっ3人ともいい感じに蒸れて よい匂いがするっ ふんふん……どきどきになる
僕のモノにしたいよ……」

「まあ あんまり心配する必要はないよ、すぐに頭のほうがちよっと
おかしくなっていて、楽しくなってくると思う……だいたい皆そうだから」



ガムッ

ガムッ

ガムッ

フッ……

フッ……
フッ……

「萎えちゃうくらい激臭の女の子は別の所に送らないといけないからちよつとチエツクするね〜」

「おほーっ……やっぱりアソコに接地エリアの匂いは……最高だね……クラクラする……」

「三人とも大丈夫だな……というかかなり良いな……これは僕が貰っておこう……んふふ」

誰か助けて

そんな彼女達の願いは誰にも届かなかった...

彼女達に支給される服は担当の趣味でびっちょり系のスポーツウェアばかり 数日間同じものを着させられ その後回収される

「うおっ…で、出るよ…んっ！」

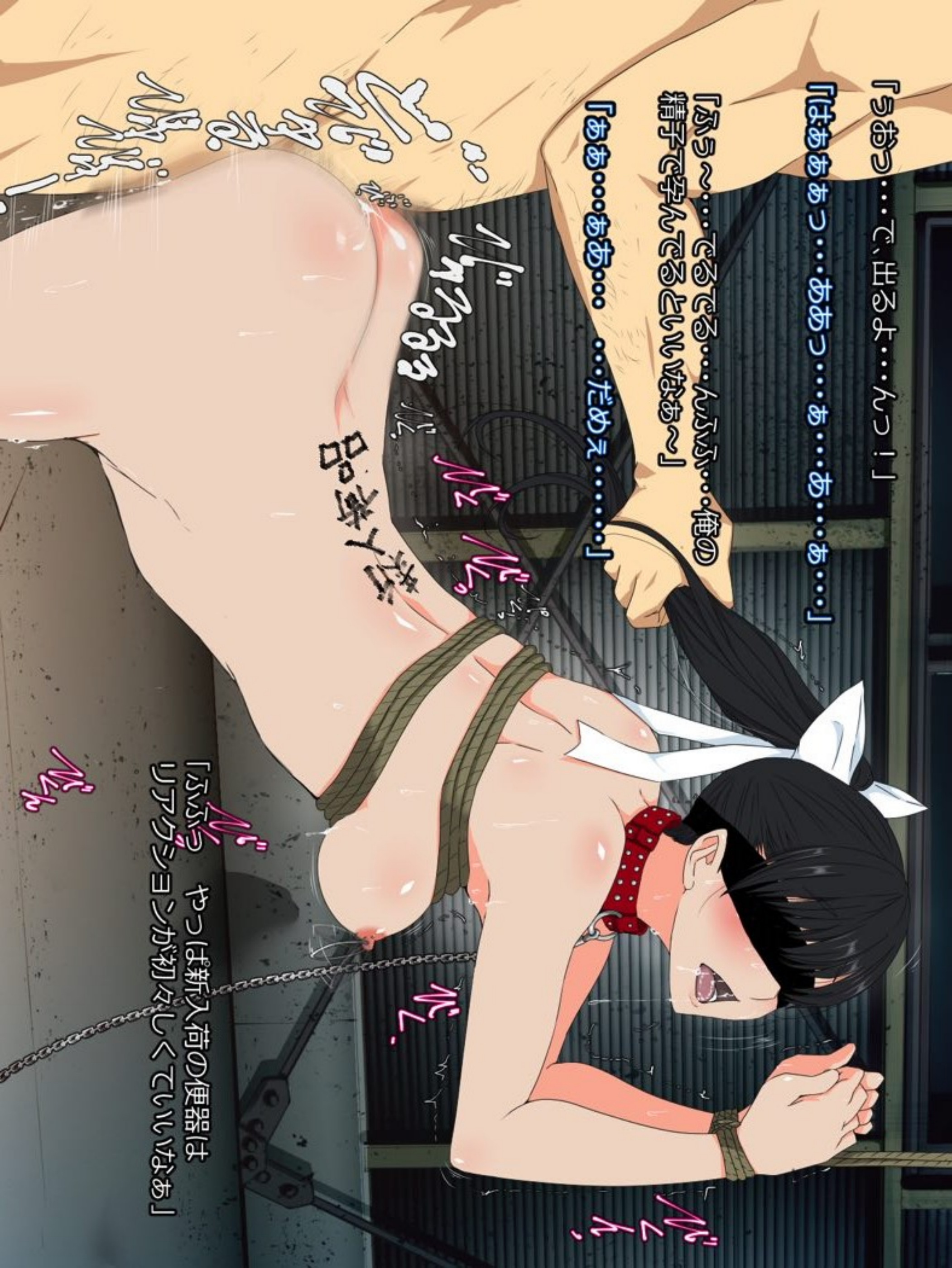
「はあああっ…ああっ…あ…あ…あ…あ…」

「ふら～…でるでる…んふふ…俺の
精子で孕んでるといふなあ～」

「ああ…ああ…だめえ…」

品ぞろえ

「ふいふい やっぱ新入荷の便器は
リアクションが初々しくていいなあ」



「そうそう、そうやってバケツに精液をためてね、溜めた量に応じて
ご褒美がもらえるから頑張って」

「……………」

「さあ、それじゃあまた おち○ちん突っ込んで
精液排泄してもらおうから こっちに来て」

「も、もう……許して……ください」

「僕に言われても……どうすることもできないんだよ
僕だって命令されてるだけだし……出産したら
しばらくお休みもらえるから……さあ、頑張って」

「……………」





「そんな... ひびく... 私を... 無器...」

「お...」

「楽しんでくださいよ」

「おなかのあたり... 無器の生肌を」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「ん...」

「俺... 長... 腰... だけ... なら... 何も... ない...」

「早... 挿... 入...」

「ん... 挿... 入...」

「挿... 入...」

「ん... 挿... 入...」

「どっ？ 便器生活 楽しいでしょ？」

「そ、そんなわけ……ない……でしょ……」

「マ○に精液を排泄されるの好きじゃないの？」

「好きなわけないでしょ……ホントに妊娠しちゃうから……も、もう許して……」

「そうか……嫌なのかあ……うん……じゃあ……しよう
マ○が嫌ならケツの穴に精液を排泄してもらおうね、それなら
妊娠しないし、マ○は使用禁止シールを貼ってあげるよ」

「そ、そんな……いや……いやあ……」



団体の相手もさせられる3人
次から次へと体内に精液を注ぎ込まれる...



このように無慈悲な仕打ちは継続され

ついに彼女たちは…

「あ……あ……お、お腹はあんまり……たたか……ないで……ください」

「ああゴメン、お腹禁止って書いてないから……
君……」
「」に連れてこられて長いの？」

「あ……えっ……じ……一年くら……どす……」

「そっかあ、まさか妊娠させられて鼻フックさせられて
ひっぱたかれながらオシッコさせられるなんて……
一年前は想像もしてなかったでしょ？」

「……あ……は……」

ひっぱたく
オシッコ出ます

精液を
顔に
あげると
ヨロコビます♡



「ふう〜 結構出たな…俺もまだまだいけるな んふふ
あれ？顔に精液かけると喜ぶんじやなかったのかな??？」

「あ…う、嬉し〜です…あ、あつが〜…い〜れ〜ますわ」

「ねえねえ このお腹の子は誰が孕ませたの？」

「…わ、わかりません…」

ひっぱたく
オシッコ出ます

精液を
顔に
かけると
ヨロコビます♡

「わかんないの！…ひどいなあ〜 ねえ？」

「…あ…う、うん…」

「そっか〜 カワイソウに…」

あ、鼻フックと目隠し取ってみていい？」

「アハハハ」

「お、可愛い顔してるじゃない?」

「あ、あつなさんはい、私も…」

「また様子を見に来るから
…頑張つてね それじゃあね」

「あ…ま、またのお越しを お待ち…しています」

「元気でいてよ 壊れちゃったりしないでね」

「が…頑張ります」

ひっぱたくと
オシッコ出ます

精液を
顔に
かけると
ヨロコビます♡



「愛花ちゃんって優等生だったんでしょ？」

「いいえ…そんなことは…あつ」

「勉強もできてテニスもすごく上手だったって聞いたよ…でもまあ肉便器になっちゃった愛花ちゃんには、もうどうでもいいとかあ〜」

「…は、はい…」

「ごらやつでずっと壊れるまで便器なんだから勉強なんかできても意味ないもんね ふふっ」

「…はい…便器の私には…無駄な…モノです」



「あ～愛花ちゃん…いいよ…いいよ…いいよ」

「あ…ありがとうございます…」

「ココに連れてこられるまで処女だったの？」

「…はい…しよ、処女でした…」

「ははっ なのに肉便器にされて妊娠させられちゃったんだ」

「…はい…」

「そんなお腹になっても毎日おち○ちん突っ込まれてるんだ」

「…はい…」

おち○ちん

「元気な子が産まれるといいね」

「はい…ありがとうございます」



「そっげって精液溜めてるの?」

「そりゃあよ〜 っしほろ溜めると
ご褒美もらえるんです」

「いっせーなご溜まったら...おっしご褒美
わんえちやっし...っしご褒美
んら...」





「今日も頑張ってる〜」

「はいっ」

「じゃあうちの畜舎して」

「はい…私は人としては終わら

肉便器として生まれ変わりました。
皆様の排泄物を体内に捨てられる
設置物として一生を捧げます」

「はいオツケー　じゃあフロアの

溢れた精液はその容器にためてね」

「はい　わかりました」

「寧々ちゃん(は男の人におっぱいさわられた事あるの?)」

「んっ…な、ないですよ…」

「じゃあ俺が初めてなんだ」

「そ、そうなりますね」

「乳首コリコリは？」

「んっ…あっ…
は、初めてです…」

「そうかあ〜 いっぱい弄くってあげるからね
ビクビクに感じて日常生活が困難になるくらい
開発してあげる」



「そ、それは…遠慮しておきます…あっ♡」



「ははは 気持ちいいわーん、わーん、わーん」

「…あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」
「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「…あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」
「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」

「あんなに気持ちいいの、初めて…」



「ほら どう？寧々ちゃん どんな感じ？」

ぞりぞり
ひびひび



「んっ…んん…ん？」



んん

んん

「ほらほら 一番奥まで入っちゃったよ」

んん
んん



裂けた感じがしたのに…いい、痛くない？！

え?!え?!…あっ…あっ…ああ…なに…なに…この感じ…

「どろかなあ？その様子だと俺たち相性いいみたいだね」

「えっ……」

「初めてなのに 奥まで入れて子宮口突かれても痛くないんですよほらっ」

「あはっ……んんっ……」



あんなに大きな手が入ってるのに……ホントに痛くない……それどころか……なんかも……じわっ……と……き……ん……と……して……お……も……ち……き……の……話………本……当……な……の……

あはっ
んんっ
んんっ

んんっ

なに…これ…きもちいい…きもちいい…
◎君…ごめん…わだしの…

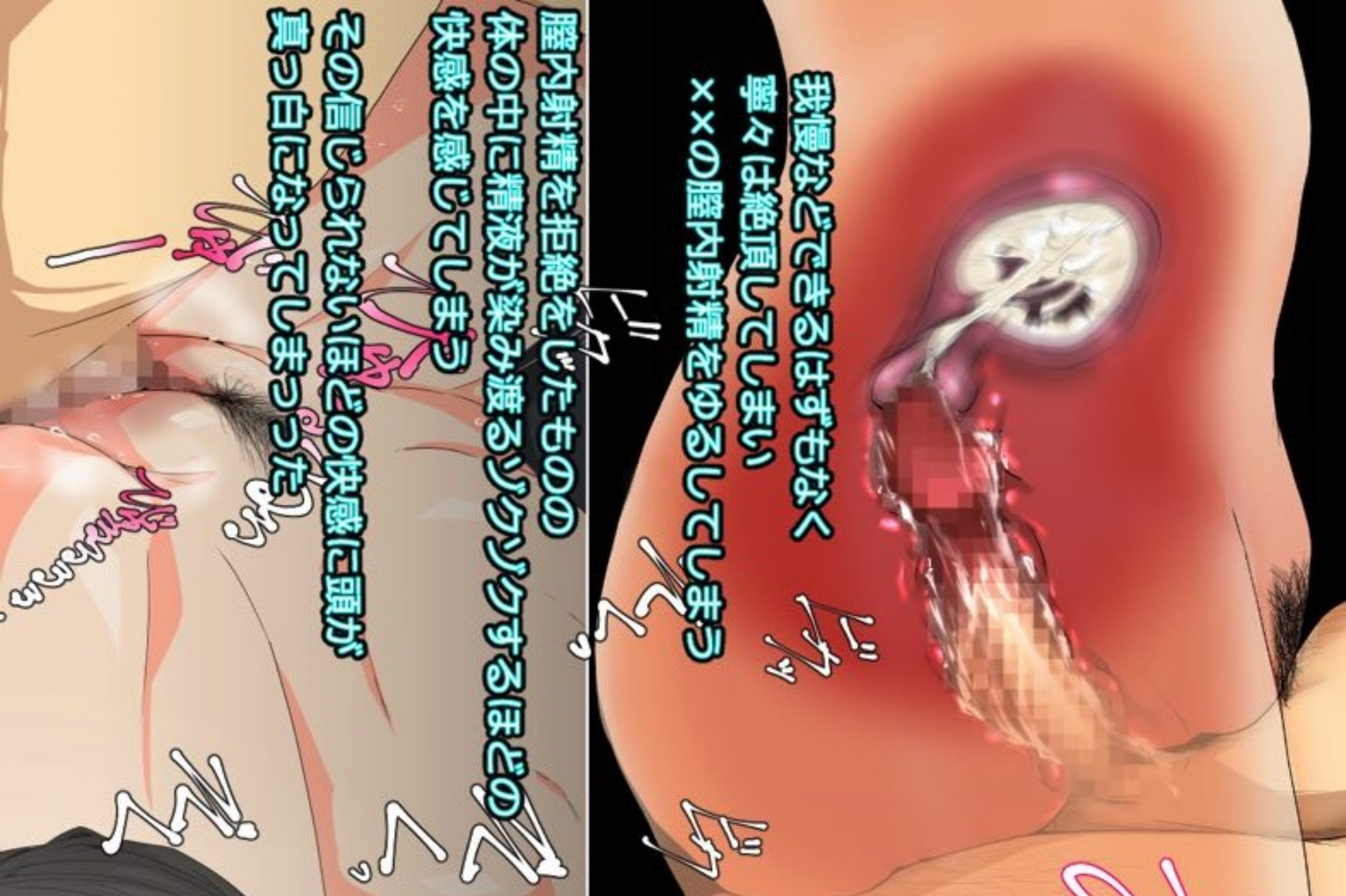
「どっでもいゝ表情になってるよ、
彼氏より俺のことが好きになってきた？」

「そ、そんなこと…ない…です」

「ホントにいい？俺たちすごく相性が
イイと思うよ、俺もすげ〜気持ちいい
おちん○んとけちやいそ〜だよ」

「んっ…んんっ…おっ♡」





我慢などできるはずもなく
寧々は絶頂してしまい
××の膣内射精をゆるしてしまう

ビクッ

ビクッ

ッ

膣内射精を拒絶をしたものの
体の中に精液が染み渡るゾクゾクするほどの
快感を感じてしまう

ビクッ

その信じられないほどの快感に頭が
真っ白になってしまった

ビクッ



ビクッ

あッ



ッ

膣内に射精されると強烈な快感に襲われる
催眠をかけられているので、目を見開いて
絶頂してしまふ寧々



そして寧々はまたしても
膣内に××の汚い精液をぶちまけられる

ほんのつい先ほども誰にも知られて
いなかった彼女が...



今ではこの有様...

処女を奪われ

精液の匂いと味を教え込まされ

××に膣内射精をゆるし

快感に酔いしれ痙攣している





